

## 新収蔵品



図1《りすのいる風景》



図2《早春》



図3《建 吉才十ヶ月 像》1942年



図4《ばら》



図5《静物》

## 南薫造 (1883-1950)

広島県賀茂郡内海町（現在の呉市安浦町）出身の南薫造は、明治末期からおよそ40年間にわたって中央画壇で活躍し続けた、日本近代洋画史を代表する画家のひとりである。その画業からいわゆる「アカデミズム」の画家のひとりに数えられるが、その作品は高慢な理想や高い技術を押し付けるものではなく、あくまでも慎ましく、どこか郷愁を感じさせる穏やかな詩情にあふれている。1907（明治40）年に東京美術学校（現在の東京藝術大学）を卒業するとすぐにイギリスに留学し、確かな技術力と知識を習得すると同時に、現地の美術館や博物館を頻繁に訪れ、ウィリアム・ターナーなどの芸術家の多様な作品から直接学びを得ている。1910（明治43）年に帰国すると、日本で初めての個人の名前を付した展覧会を開催し注目を集めるとともに、文展で連続して賞を獲得するなど目覚ましい活躍を見せた。1913（大正2）年の日本水彩画会創立に携わったほか、創作版画の先例となる自刻自摺の木版画を手がけるなど、その後も精力的な活動を続けている。また官展の審査員を長年務め、1932（昭和7）年からは東京美術学校で教鞭をとり、1944（昭和19）年には帝室技芸員にも任命された。

ふくやま美術館は、2023年度に、遺族である南建氏より油彩画27点（うち2点は両面作品）、水彩画7点、デッサン5点の全39点をご寄贈いただいた。当館は、南の代名詞ともいえる欧州留学時代の瑞々しい水彩画、帰国後に故郷の瀬戸内を印象派風のタッチで描いた油彩画、そして第1回帝展に出品された《夏》など、画家の画業を代表する作品をすでに多数所蔵している。今回寄贈された作品は、安浦の画家のアトリエに残されていた習作が中心であり、美校時代から晩年までその時々画家の関心を窺い知れるものとなっており、既存の所蔵作品をより深く知るためにも有益な作品群である。南らしい温かみのある筆致で身近な風景を描いた作品や、当館所蔵品と関連のある作品、終戦直後の広島情景を捉えた貴重なスケッチなど、南薫造の魅力をより豊かに味わうことができる。本誌では、このたびの寄贈作品から10点を紹介する。



図6《初夏の庭》



図7《庭の雪》



図8《スケッチ(ピアノ)》



図9《農村風景》



図10《スケッチ(原爆ドーム)》

## 身近な風景

《初夏の庭》(図6)と《庭の雪》(図7)は、いずれも安浦の実家の庭を描いた作品である。南は、東京美術学校進学のために上京した後も、たびたび故郷に戻り、瀬戸内の風景を写しとっている。また1944(昭和19)年には家族とともに故郷に疎開し、その後亡くなるまでこの地の復興に尽力した。最も身近な自然を描いた2点の作品は、季節によってその趣を変える庭の様子が見事に表現されている。安浦周辺の情景を画家は「景色としては大して変つても居らぬ代わりに、色だけは誠に鮮やか」であると述べる。これらの作品には、遠くに霞む山の色や庭の緑、わずかにピンク色に染まる空などが多彩な色で表現されている。

1935(昭和10)年に別荘を建て、たびたび訪れた軽井沢周辺の情景もまた南にとって身近な風景であった。ここで描かれたと思われる《りすのいる風景》(図1)では、豊かな緑の中に入りすやきつつきなどがあり、瀬戸内とは異なる、柔らかな光が射す涼やかな雰囲気を感じることができる。

## 所蔵作品との関連

1918(大正7)年、南は東京に自宅とアトリエを新築している。作風からその直後の1920年代の作だと思われる、西洋風の洒脱な家の中の様子を描いた《室内》を当館は所蔵している。今回の寄贈作品のひとつ《静物》(図5)は、花が生けられた花瓶がこの所蔵作品に描かれたものと同じ形、同じ模様をしていることから、同時期の作品だと思われる。欧州留学後の1910年代前半の筆触を細かく分割する手法とは異なり、粗めの太い筆致で、色の塊としてそれぞれの花を捉えている様子に南の作風の変化を見ることができ、興味深い。また《スケッチ(ピアノ)》(図8)は、この東京の自宅でピアノに向かう画家の娘を写生したもので、ひろしま美術館が所蔵する《ピアノの前の少女》(1927年)の習作として描かれた可能性が考えられる。

《農村風景》(図9)は、南が多数描いた農民の情景のひとつであるが、田んぼで働く人びとを高い位置から俯瞰的に捉えた構図が特徴的である。当館所蔵作品には、同じように上から風景を捉え、周田の風景を省略し、田畑の幾何学的な形を強調した水彩作品《農地の眺め》がある。今回寄贈された油彩作品では、中景、遠景の変化に富んだ自然の様子と、人工的に区画された農地の形が対比的に表現されている。ここには、田園の情景を客観的な視点で捉える画家の様子を窺うことができる。

農村風景は、南が得意としたジャンルである。帰国後すぐに官展で高い評価を得たのも、故郷である瀬戸内で暮らし、働く人びとを描いた《六月の日》(1912年、東京国立近代美術館蔵)などの作品によってであった。だが画家は、1912(明治45/大正元)年に雑誌『白樺』に連載したエッセイの中で、田舎に帰ってもそこに完全に溶け込むことができず、かといって完全な都会人にもなれない自身の心情について語っている。だからこそ、地方の農村で生活する人々を、内でも外でもない冷静な、しかし温かいまなざしで表現した作品群が生まれ得たのだと考えられる。

## 戦後広島的情景

今回の寄贈作品には、美校時代の模写など、資料として貴重なデッサンが複数ある。その中でも目を引くのが戦後の広島の様子を描いたスケッチ(図10)である。南薫造といえば、欧州留学時代の水彩画、瀬戸内の農村や海などを描いた風景画など、社会的な出来事や時代と乖離した作品が思い浮かぶ。詩情豊かな風景が南作品の魅力であることは間違いないが、画家が生きた時代は、西洋のモダニズムといった新しい芸術思潮が次から次へと日本にも紹介され、画壇も大きく変化し、政治的にも戦中・戦後という動乱の時期であったことを忘れてはならない。ヴァラエティに富んだ寄贈作品が新たに加わることで、新しい芸術思潮を柔軟に受け入れながら、動乱のなかでも穏やかで清新な作品を描き続けた南薫造のより豊かな姿を感じていただければ幸いである。

(学芸員 鈴木一生)